

医療福祉機関における職業感染リスクと マネジメントの実態

し わ く く に の り は る き ゆ う こ ま せ だ こ
 塩 飽 邦 憲^{1,2)} 春 木 宥 子¹⁾ 間瀬田 あい子¹⁾
 や ま さ き ま さ ゆ き い わ も と ま み こ か か ず な お き
 山 崎 雅 之²⁾ 岩 本 麻実子²⁾ 嘉 数 直 樹²⁾
 よ し か わ と お る な か し ま き よ お
 吉 川 徹³⁾ 中 島 雪 夫¹⁾

キーワード：病院，職業感染，針刺し，血液，リスクマネジメント

要 旨

医療福祉就業者数は2005年には建設業と同数の535万人となり、増加し続けている。医療福祉職場では、針刺し切創等による血液媒介性感染症、血液・体液曝露以外の感染症のリスクが高く、職業感染対策の確立が急務となっている。このため、島根県内の合計31の医療福祉機関において職業感染の実態と対策を調査した（回収率65%）。職業感染対策に取り組んでいる医療福祉機関は80%であった。血液・体液曝露事例の労災・公災申請については、半数（県公立病院）で全数行われており、3割（独立大学法人、私立病院）が感染事例のみに限っていた。針刺し切創サーベイランスの共通書式であるエピネット日本版の活用は、大規模な3病院に限られていた。平成16-17年度の血液・体液曝露件数は5-6件/100病床/年であった。院内感染対策委員会の設置と活動については、院内感染対策委員会は95%に設置されていたが、血液・体液曝露対策を行っているのは85%であった。安全衛生委員会は95%に設置されていたが、血液・体液曝露対策実施は55%と低かった。安全装置つき器材を95%の機関が導入し、その有効性を高く評価していた。血液・体液以外の曝露報告では、結核とインフルエンザの曝露が最も多く、300床以上の病院では年々増加していた。血液・体液曝露以外の職業感染への対応マニュアルについては、70%の医療機関が作成していたが、空気・飛沫感染病原体について取り組みは不十分であった。安全・感染対策のスタッフと労働安全スタッフとの協働による職業感染リスクマネジメントシステムの構築、中小医療機関や介護福祉機関への支援を強化するために、これらの安全衛生担当者への情報提供・教育が課題と考えられる。

は じ め に

Kuninori SHIWAKU et al.

1) 島根産業保健推進センター

2) 島根大学医学部環境保健医学講座(環境予防医学)

3) 財団法人労働科学研究所

連絡先：〒690-0887 松江市殿町111 松江センチュリービル

産業界で医療産業は重要な役割を果たしており、業種別の被雇用者数では、医療部門は米国で